

貴重書庫

文教育学部授業科目履修案内

2019 年度生用

2019 年 4 月



お茶の水女子大学
Ochanomizu University

目次

はじめに	3
学科・コース・環とプログラム	4
1. 組織とカリキュラムの概要	4
2. 卒業するために必要な科目と単位	4
3. 主プログラム選択の日程と手続き	5
4. 第二プログラム（強化・副・学際プログラム）の選択	5
5. 自由選択（第三）のプログラム	6
6. 学部における学修支援	6
7. 履修にあたっての留意事項	6
人文科学科	9
1. 学科の概要	9
2. 哲学・倫理学・美術史コース	10
3. 比較歴史学コース	11
4. 地理学コース	13
言語文化学科	17
1. 学科の概要	17
2. 日本語・日本文学コース	19
3. 中国語圏言語文化コース	21
4. 英語圏言語文化コース	23
5. 仏語圏言語文化コース	25
人間社会科学科	29
1. 学科の概要	29
2. 教育科学コース	30
3. 社会学コース	31
4. 子ども学コース	32
芸術・表現行動学科	37
1. 学科の概要	37
2. 舞踊教育学コース	38
3. 音楽表現コース	39
グローバル文化学環	43

学科・コース・環とプログラム

1. 組織とカリキュラムの概要

文教育学部は、4つの学科で構成されています。各学科にはさらに複数の履修コース（以下単に「コース」と表記します）が置かれ、また学科の枠を超えたグローバル文化学環（以下「環」と表記します）が設置されています。皆さんは2011年度から導入された複数プログラム選択履修制度のもとで学ぶことになりますが、その各種プログラム（主・強化・副・学際）を提供し運営していく組織が、コース・環ということになります。そしてプログラムの科目群を担当する教員や、主プログラムを選択した学生が所属する組織、すなわち皆さんが専門教育を学んでいく足場、拠り所となるところです。ただし、芸術・表現行動学科は、その学びの専門性を活かすため複数プログラム選択制を取らず、4年一貫の専修プログラムによって専門教育の課程を運営します。

人文科学科・言語文化学科・人間社会科学科の皆さんは、2年次に進む際に、自分が所属する学科のいずれかの主プログラムまたは環の主プログラムを選択します。主プログラムには卒業論文・卒業研究が含まれています。文教育学部では卒業論文・卒業研究は必修であり、皆さんの学びの最終到達目標ですので、どの主プログラム＝学問領域を選ぶかが非常に重要です。したがって、2年次にどの主プログラムを選択するかについて、1年生のうちによく考えてください。主・専修プログラムを提供するコースまたは環が皆さんにとっての専門教育の、そして大学生活の拠点となります。

2. 卒業するために必要な科目と単位

卒業するために必要な単位（124単位）の内訳は、おおむね次のようになっています。それぞれの履修にあたっては細かい決まりがありますので、『履修ガイド』をよく読んで、取り方をまちがえないようにしてください。

	人文科学科	言語文化 学科	人間社会 科学科	グローバル 文化学環	芸術・表現 行動学科
コア科目	40単位	40単位	32単位	40単位	32単位
専門教育（必修プログラム）	64単位	64単位	68単位	64単位	64単位
主プログラム	(44単位)	(44単位)	(48単位)	(44単位)	
強化／副／学際プログラム	(20単位)	(20単位)	(20単位)	(20単位)	
専修プログラム					(64単位)
自由に選択して履修する科目・単位	20単位	20単位	24単位	20単位	28単位

3. 主プログラム選択の日程と手続き

1年次の10月に希望主プログラムの希望予備調査が実施されます。予備調査ですから、これで決定するわけではありませんが、必ず回答してください。

1年次の1月上旬に希望主プログラムを申請します。この申請に基づいて主プログラムが決定します。決定結果は2月下旬に発表されます。この申請から決定までのプロセスは次のとおりです。

- (1) 2年次から履修する主プログラムは、1月上旬に申請してもらいます。各主プログラムの申請者数は、各主プログラムの受け入れ上限数と合わせて、申請締切り後数日以内に公示します。すべての主プログラムにおいて、申請者数（第一希望者の数）が受け入れ上限数を下回っている場合は、2月下旬の教授会においてそのまま決定します。
- (2) 申請者数が受け入れ上限数を上回っている主プログラムがあれば、当該主プログラム担当のコース・環において選考します。
- (3) グローバル文化学主プログラムは、人文科学科・言語文化学科・人間社会科学科の学生が選択できます。受け入れ上限数は、各学科の申請者総数の15％程度（人数の小数点以下は四捨五入）となっています。ただし、3学科のいずれかにおいて第一希望者の数が受け入れ上限数を下回った場合（A）で、別の学科において第一希望者の数が受け入れ上限数を上回った場合（B）、あるいはAの学科において第一希望のプログラムの申請が認められず、かつ第二希望をグローバル文化学主プログラムにしている学生がいる場合（C）、選考によってBあるいはCの学生がグローバル文化学主プログラムを選択することを、Aにおける受け入れ上限数を超えない範囲で認めます。
- (4) 他の学科の主プログラムの選択希望者は、12月中に転学科の申請を行うことが必要です。芸術・表現行動学科の学生がグローバル文化学主プログラムを希望する場合は、人文科学科・言語文化学科・人間社会科学科のいずれかの学科に転学科の申請を行うことが必要です。人文科学科・言語文化学科・人間社会科学科の学生がグローバル文化学主プログラムを選択することを希望する場合は、転学科は認められません。
- (5) 他学部からの文教育学部の主プログラムの選択希望者は、12月中に転学部の申請を行います。
- (6) 上記(4)および(5)においてグローバル文化学主プログラムを選択することを希望する学生については、(3)の規定にかかわらず、個別に選考を行います。

（注意）

- ①1年次の間に6ヵ月を超えて休学した場合は、主プログラムの希望申請はできません。
- ②転学科の手続きについては、『履修ガイド』に書かれていますが、プログラムの申請に間に合うよう、早めに学年担当の教員に相談してください。
- ③一度主プログラムを決定してから（すなわち2年次以上の学年において）、主プログラムを変更する場合は、改めて希望主プログラムを年度末に申請することになります。その場合、希望する主プログラムの学生数が上限数を下回っていて、かつ当該プログラム担当コース・環が変更の理由を妥当であると判断して受入れを可とすれば、変更が認められます。簡単に変更することはできませんので、1年次の申請の際に、何を学びたいのか、しっかり考えて選んでください。

4. 第二プログラム（強化・副・学際プログラム）の選択（人文科学科・言語文化学科・人間社会科学科の主プログラム選択者）

人文科学科・言語文化学科・人間社会科学科の学生は、3年次に進む際に、自分の主プログラムと同名の強化プログラム、違う分野の副プログラム、または学際プログラムを選択します（た

だし文教育学部が提供しているプログラムに限りです)。また選択できるプログラムには一部に制限がありますので、『履修ガイド』で確認してください。主プログラムと、強化、副または学際プログラムの中から一つを組み合わせる履修することが専門教育課程の必修となっています。

強化・副・学際プログラムの履修は3年次から始まりますが、各プログラムに含まれる授業科目には、1年次あるいは2年次から履修できるものもあります。プログラムを選ぶ前に、そのプログラムに含まれる入門的な授業科目を早めに履修しておくことで、そのプログラムの内容をある程度事前に理解し、選択の判断材料とすることができます。

5. 自由選択（第三）のプログラム

人文科学科・言語文化学科・人間社会科学科の皆さんは上記の必修のプログラムに加えて、また芸術・表現行動学科の皆さんは専修プログラム以外に、自由選択の第三のプログラムとしていずれかの副・学際プログラム（他学部提供のプログラムを含む）を選択して履修することができます。この三つ目に選択できるプログラムには制限がありますので、『履修ガイド』で確認してください。

この自由選択（第三）のプログラムの単位は、「自由に選択して履修する科目・単位」として、卒業に必要な単位にカウントされます。また、プログラムの全単位（20単位）を修得しなかった場合でも、履修した科目の単位は「専門教育科目」「他学部の科目」などとして「自由に選択して履修する科目・単位」にカウントされます。

6. 学部における学修支援

全学の学生のために教学IR・教育開発・学修支援センターがありますが、文教育学部においては、次のような学修支援の仕組みを整えています。

ピア・サポート・プログラム…1年生が早く大学生活に適応できるよう、入学時にボランティアの上級生が履修や大学生活に関するさまざまな相談にのってくれます。気軽に相談してください。

学年担当教員…各コースや環の教員が、各学年の担当となって、その学年の学生が卒業するまで、主として学修面での相談の窓口になります。

オフィス・アワー…教員が研究室にいて、学生の皆さんの相談を受ける時間をそれぞれ設定しています（毎週の特定の曜日・時間帯）。詳細は学部のホームページを参照してください。

7. 履修にあたっての留意事項

文教育学部の各学科（コース・環）には選択科目がたくさん開設されています。主プログラム（コース・環）や強化、副または学際プログラムを選ぶだけでなく、科目の選択の仕方を工夫することによって自分のカリキュラムを作り、自分の研究テーマを深めてください。

ただ、同一学期中に多数の授業科目を履修することは適切ではありません。4年間の学習の成果は取得した単位数の多さで評価されるわけではありません。研究テーマに即した科目を精選し、その授業の内容を深く理解することが大切です。特に1、2年次には必修科目が多いので、それに加えて多くの科目を選択してしまわないように注意してください。資格取得のための科目を含めても1年間で50単位を大きく上回らない範囲で、適切な科目を選んでください。

人 文 科 学 科

人 文 学 科

1. 学科の概要

(1) 教育の目標

人文科学科は、人類がこれまで辿ってきた様々な歩みの中から、未来の英知につながるあらゆる現象を広く文化としてとらえる人間の知の総合学をめざしています。地球上に展開している様々な文化・民族・社会に見られる違いや共通する問題を把握するために、基礎的な思考力を養成し、画像を含む幅広い資料や現地調査に基づく実証的分析、時間的・空間的な分析に基づいて、人間の活動の本質を多角的に追求するための研究と教育を行います。

人文科学科の学生は、入学後1年の基礎課程ののち、専門課程として、哲学・倫理学・美術史、比較歴史学、地理環境学、グローバル文化学のいずれかの主プログラムを選択します。3年次に進学する際に主プログラムと同名の強化プログラムを選んだ学生は、それぞれの分野を専門的に学び、ねばり強い資料・データの収集・整理した上での独自の論理を築き上げる力、そして研究を続けていく場合でも、社会に出て活躍する場合でも必ず求められる人間の知の総合学を、身に付けます。主プログラムと違う分野の副または学際プログラムを選択した学生は、哲学・倫理学・美術史、比較歴史学、地理環境学の専門知識を基礎として、各自の関心に合った学際的な研究を進めることになります。

(2) 学科共通科目

人文科学科全員を対象として、思想文化、歴史、社会、環境の基礎を講じる学科共通科目が7科目開講されていますので、4科目（8単位）以上を選択履修してください（グローバル文化学主プログラムを選択する場合を除く）。「哲学基礎論」「倫理学基礎論」「美術史基礎論」は哲学・倫理学・美術史の、「比較社会史」「比較文化史」は比較歴史学の、「自然と人間」「人間と空間」は地理環境学の概要をつかむのに適した科目です。

(3) 1年次の入門的科目

学科共通科目の他に、各主プログラムを選択するときに参考となる入門的な科目があります。「哲学概論Ⅰ」「哲学概論Ⅱ」「倫理学概論Ⅰ」「倫理学概論Ⅱ」「美術史学概論」は哲学・倫理学・美術史の、「日本文化史概論」「日本史概説」「アジア史概説」「西洋史概説」「日本史入門講読」「外国史入門講読Ⅰ」「外国史入門講読Ⅱ」は比較歴史学の、「都市と自然」「地理学英書講読」「地図学」は地理環境学の概要をつかむのに適しています。1年次では、コア科目を中心としながら、学科共通科目と、各プログラムが提供する入門的な科目を受講して、自分の興味と比べてみてください。

(4) 主プログラムの選択

哲学・倫理学・美術史、比較歴史学、地理環境学の3つの主プログラムでは、皆さんの志望を尊重するために定員制限は原則として行わず、希望どおりに選択することができます。しかし、志望者数が極端に多く、十分な教育が行えないと判断した場合は、選考を行うことがあります。グローバル文化学主プログラムは学生数の15%程度が上限定員で、その選考方法は、5ページおよびグローバル文化学環のページに説明があります。

2. 哲学・倫理学・美術史コース

(1) 全般的な注意

哲学・倫理学・美術史の3分野ごとに卒業まで履修すべき科目がそれぞれ異なります。各自の希望する分野の指定する授業科目に従い計画的に履修してください。

(2) コア科目について

哲学・倫理学・美術史コースでは、いずれも専門の基礎として総合的な知識やものの見方を重視するので、基礎的内容の講義、関連するL A科目は進んで受講し、所定最低単位にとらわれず積極的に履修してください。

外国語は、英語の他に未修外国語を積極的に履修してください。本コースの授業や研究したい専門領域で必要とされる言語を念頭におき、よく考えて選択してください。その際、同一の言語を2ヵ年にわたって履修することが望ましいです。

(3) 主プログラム

哲学・倫理学・美術史主プログラム(44単位)は次のように履修することになっています。

必修科目として、「哲学基礎論」「倫理学基礎論」「美術史基礎論」から4単位以上を選択して履修します。

学科共通科目として、「比較文化史」「比較社会史」「自然と人間」「人間と空間」から4単位以上を選択して履修します。

卒業論文は、4年次に履修することになります(必修)。

哲学・倫理学・美術史のそれぞれの分野において、概論・特殊講義・演習・講読などがあります。概論においては主として基礎的な知識やものの見方を習得し、特殊講義においては主として専門的応用的な知識やものの見方を習得します。演習・講読ではテキストの批判的な読み方を学び、ものの見方を活用する訓練を行います。履修にあたっては、興味や関心を中心として分野を考慮し、体系的計画的な学習を心がけてください。

(4) 強化プログラム

強化プログラム(20単位)においては、主プログラムで履修した概論・特殊講義・演習・講読に加えて、哲学分野・倫理学分野・美術史分野のそれぞれの研究をさらに深めるように専門科目を配置しています。

なおこのプログラムにおいては、「哲学研究指導Ⅰ」「哲学研究指導Ⅱ」(以上哲学分野)、「倫理学研究指導Ⅰ」「倫理学研究指導Ⅱ」「倫理学研究指導Ⅲ」(以上倫理学分野)、「美術史学研究指導Ⅰ」「美術史学研究指導Ⅱ」「美術史学研究指導Ⅲ」(以上美術史分野)があり、それぞれの分野において連続して履修をすることになっています。

3. 比較歴史学コース

(1) コースの概要

比較歴史学主プログラム(これを選択した学生が所属するのが比較歴史学コースです)は、大きく日本史、アジア史、西洋史の三つの専門分野を大きな枠組みとしています。そして、その一つの枠にとらわれるのではなく、地域や時代の軸を縦横に移動し、相互の比較や連関・交流に着目し、複眼的視点や社会史の視角を重視しながら、歴史研究を通してその社会全体を俯瞰しその全体像を総合的に把握できるような柔軟な思考力を養うことを目的としています。これまで当たり前とされていたことを疑い、自分なりの問いを立て、そのための論拠(史料)を探し、論理を組み立てるといった歴史研究の基礎的手法を身につけることを目指しています。すなわち、歴史はいつの時代でも人間社会の反映というべきものであり、歴史を学ぶことは社会の生きた場で非常に有効な実践力を養うことにつながります。

(2) コア科目について

1) コア科目の外国語の必修単位は20単位です。英語、ドイツ語、フランス語、中国語のうち、二つの言語についてそれぞれ8単位修得すること。残りの4単位は上に挙げた4つの言語のほか、ロシア語、朝鮮語、スペイン語、イタリア語、アジア諸語から選択し、あわせて20単位以上を修得しなければなりません。各外国語の履修方法の詳細については、別に配布される『履修ガイド』を参照してください。

2) 外国語は、できれば複数の言語を履修することを勧めます。上記以外にも、学部共通科目として、ギリシャ語、ラテン語が開講されていますので、(とくに外国史を専攻したい人や将来大学院を志望している人などは)自分の研究したい地域の言語について履修してください。

3) 情報やスポーツ健康についてはできるだけ1年次に履修しておいてください。コア科目は専門教育の土台となるべき基礎的な授業ですから、2年次までに必要単位を満たしておくことが望まれます(2年次まではコア科目を履修しやすいように時間割が組まれています)。

(3) 主プログラム科目について

比較歴史学主プログラムを選択した学生(以下、主選択学生と称します)は、卒業までに卒業論文を含む44単位の取得が必要です。なお、この単位数は必要最低限の目安ですから、これにとらわれず多くの専門教育科目を履修してください。

1) 学科共通科目は、必修の「比較社会史」「比較文化史」4単位(共通のテーマを設定して、比較歴史学の教員が交替で授業を担当しますので、教員の人となりやコースの雰囲気をつかむのに最適です。これまでのテーマは、たとえば「食と文化」「ホモセクシュアル」「戦争」「旅」「踊り」「リスク」「身分感覚」「他者」等々です)のほか、人文科学科の他コース開設科目から4単位を選択し、合計8単位を履修してください(卒業のための必修単位。なお他コース開設科目が主プログラムの単位として認定されるのは4単位だけです。4単位を超えて履修した単位は、主プログラムには算入されませんので注意してください)。

2) 1年次には、日本史・アジア史・西洋史3分野の「概説」および「日本史入門講読」「外国史入門講読」といった初級入門型の授業が開かれています。とくに「入門講読」は、ゼミ形式で行われることもあり、大学で学ぶ歴史学がどういうものか、実体験するのに最適な授業です。「概説」や「入門講読」から3~4科目程度を履修してみることをお勧めします。

- 3) 2年次に学生は主プログラムを選択して、いよいよ専門的な学修を始めることになります。中級授業として、日本史・アジア史・西洋史3分野の「研究法(1)(2)」および「講読」が開講されます。前期に開講される「研究法(1)(2)」は、文献や必要な情報の集め方、史料の読み方、といったそれぞれの分野の研究方法について学びます。後期開講の「講読」では、史料や文献を実際に読みながら、歴史学の研究作法について体得します。「研究法(1)(2)」「講読」の6科目から、自分の専攻したい分野を中心に、4科目(以上)を選択することを推奨しています。また、後期には「日本史論文講読」「外国史論文講読」が開講されます。どちらも、歴史学の研究論文(日本語)を毎回読むことで、専門論文とは何かを学んでもらう授業です。で、どちらかを履修してください。また、日本史では史料の基礎的な読解能力を身につけてもらうために「古文書学」「歴史史料学」といった科目を設けています。日本史を専攻したい人は自分の時代・分野にあった授業を選択して履修してください。なお、主プログラムには含まれていませんが、各分野の特殊講義(時代やテーマを絞った専門的な講義)が2年次より履修できますので、分野にこだわらず興味のある科目を履修してみてください。
- 4) 3)の科目以外にフィールド調査を中心とする授業として、2年次からは、「歩いて学ぶ比較歴史」、3年次からは「歴史現地調査」「歴史史料調査」といった科目が開かれます。土日や長期休暇中に実施される課外授業ですが、興味があれば是非履修してください。
- 5) 3年次からは、いよいよ演習が始まります。歴史学の専門教育科目の中核というべき授業で、史料や論文を読み、研究発表を行います。3年次には通年で2科目以上、4年次でも卒論を書く分野のゼミを必ず選択してください。卒業のためには12単位が必修です。また、3分野のいずれも選択可能です。たとえば日本史から二つ選ぶのはもちろん、日本中世史専攻の人が西洋中世史のゼミに出たり、中国史専攻の人が日本古代史ゼミに出たり、といった分野を超えた選択をしてもかまいません。
- 6) 4年生の12月には卒業論文を作成し、提出しなければなりません。卒業論文は必修です(8単位)。テーマは、基本的に学生の希望、自主性を尊重します。卒業論文のテーマは、それこそ多岐にわたります(過去の卒論テーマは、比較歴史学の各教員のページに一部が載っています)。大学での学修の集大成として、みなさんには高みを目指してもらいたいと思います。そのためにも、テーマや史料について指導教員と早めに相談することをお勧めします。

(4) 強化プログラム

比較歴史学強化プログラム(20単位)は、主選択学生のみが履修できます。上記の主プログラム科目と並んで、各分野の特殊講義がこれに加わっています。主+強化を選択しようという学生は、強化プログラム20単位を履修するというより、主+強化合わせて64単位を履修すると考えたほうがわかりやすいでしょう。また、主プログラム44単位を超過して取得した単位は、ほとんどがこの強化プログラムに充当されます。主に加えて強化プログラムを履修することで、幅広い基礎学力を養いながら、一方でより高度な歴史学の専門性を身につけることができるはずです。強化プログラムを選択するのは正式には3年次になってからですが、概説や研究法など歴史学の基礎を学ぶ授業は、1、2年生向けに開講されていますから、なるべく早い時期から体系的に履修計画を立てていくことが望まれます。

4. 地理学コース

(1) 履修計画

地理学の学問的特徴は、地表面の特定の場所や地域で起こる自然・人文・社会現象を複合的に関係づけて考えるところにあります。ちなみに、地理学は環境学と結びつきが深いため、プログラム名は「地理環境学」としています。具体的な場所や地域への生き生きとした関心をもちながら、他学科・他コース(場合によっては、他学部も)の科目も幅広く学んでください。中学社会科・高校地歴科の教職免許の他に、地域調査士、GIS 学術士、社会調査士などの免許を取りたい人は、1年次から履修計画を周到に考えておくことをおすすめします。

(2) コア科目

情報処理演習は、自然観測、地域分析、地図作成、卒業研究などの基礎になります。外国語は、未履修の外国語も積極的に学んでください。スポーツ健康では、フィールドワークを行う上での健康な体力を維持する基礎を学んでください。文理融合リベラルアーツでは、「生命と環境」「生活世界の安全保障」の系列に、地理環境学プログラムに関連する科目群が含まれます。

(3) 主プログラム

地理環境学主プログラム(44単位)は、次のような履修の構成を取っています。

学科共通科目：1年次に「自然と人間」「人間と空間」(必修)に加えて、2科目以上を選択して履修してください(卒業のための必修単位。なお、他コース開設科目が主プログラムの単位として認定されるのは、4単位だけです)。

入門科目：1年次に「都市と自然」「地理学英書講読」「地図学」の履修をすすめます。

講義：上記の入門科目とあわせて、1～3年次に「自然地理学」「都市地理学」「経済地理学」「社会地理学」「地誌学」の講義科目、および「測量学」「地理情報システム演習Ⅰ」の地図学科目から5科目以上を選択履修します。

基礎演習：2年次に「環境地理学基礎演習」「人文地理学分析基礎演習」の中から少なくとも1科目を選択履修します。

専門演習Ⅰ：2～3年次に、「地域分析学」「自然地理学」「環境地理学」「社会地理学」「都市・福祉地理学」の各演習から1科目以上を選択履修します。

フィールドワーク科目：1～3年次に、「地理学フィールドワークB」(日帰り7日間と講義、報告書作成)を履修し、3年次に、「地理学フィールドワーク演習」「地理学フィールドワークA」(4泊5日)を履修します。いずれの科目も必修です。

卒論科目：3年次後期に「地理学研究法演習」、4年次前期に何れかの分野の専門演習Ⅱ、4年次後期に「地理学卒業演習」を履修しながら、4年次通年で「卒業論文」に取り組みます。いずれの科目も必修です。

(4) 強化プログラム

主プログラムでは履修しなかった科目から20単位を選択して履修します。特殊講義にあたる「地理環境学演習Ⅰ～Ⅳ」の他に、社会学、グローバル文化学環の各プログラムで関連する科目群、さらには理学部、生活科学部の環境学・生活学関係の科目群から、幅広く選択することができます。これらは他分野の科目群ですが、地理環境学の卒業論文の作成で大いに関連してくる科目として、地理環境学の強化プログラムに組み入れてありますので積極的に履修してください。

A vertical color calibration strip featuring 24 color patches arranged in two columns of 12. The patches include a range of primary, secondary, and tertiary colors, as well as a grayscale ramp from white to black. The strip is used for ensuring color accuracy in digital imaging and printing.

言語文化学科

言語文化学科

1. 学科の概要

(1) 教育の目標

言語は人間の思考やコミュニケーションのもっとも重要な手段です。本学科では、今後の職業や社会生活に役立つように、日本語および外国語の運用能力を高める訓練を行います。さらに、言語を単なる道具としてのみとらえるのではなく、その歴史や構造について考察したり、人間が今までに築き上げてきた言語文化について深く研究するための知識や技術を習得します。

本学科の学生は、2年次に進学する際に日本語・日本文学、中国語圏言語文化、英語圏言語文化、仏語圏言語文化の主プログラムのいずれか、またはグローバル文化学的主プログラムを選択します。コースの主プログラムに加えて3年次に進学する際に主プログラムと同名の強化プログラムを選ぶ学生は、それぞれの分野を専門的に学び、それに関する深い知識と研究手法を身につけることになります。また、主プログラムに加えて違う分野の副または学際プログラムを選ぶ学生は、日本語・日本文学、中国語圏言語文化、英語圏言語文化、あるいは仏語圏言語文化を中核とする学際的な研究を進めることになります。

(2) 全般的な注意

1年次にはコア科目、全学・学部・学科共通科目を中心に履修してください。なお主・強化・副プログラムに設定されている専門教育科目のうち、標準履修年次が1年次からとなっているものについては、早めに履修することを勧めます。詳細は、各プログラムの項を参照してください。

(3) コア科目の外国語について

言語文化学科の外国語必修単位は20単位です。英語、ドイツ語、フランス語、中国語のうち、二つの言語についてそれぞれ8単位修得すること。残りの4単位は英語・ドイツ語・フランス語・中国語、もしくはロシア語・朝鮮語・スペイン語・イタリア語・アジア諸語から修得すること。各外国語の履修方法の詳細については、別に配布される『履修ガイド』を参照してください。

(4) 学科共通科目

言語文化学科には、「日本文学概説」「日本語学通論」「英語圏言語文化入門(1)(2)」「中国現代文学史」「中国古典文学史(宋～清)」「ヨーロッパ言語文化論Ⅰ・Ⅱ」「言語学入門Ⅰ(1)(2)」「言語学入門Ⅱ」(いずれも各2単位、(1)(2)の表記のある科目はそれぞれ1単位)という8つの学科共通科目があり、8単位以上修得しなければなりません。プログラムを選択する際の参考とするためにも、できるだけ多くの科目を履修してください。

(5) 主プログラムの選択

主プログラムの履修者の受け入れ上限のめやすは、原則として日本語・日本文学と英語圏言語文化が33人、中国語圏言語文化と仏語圏言語文化が12人、そしてグローバル文化学主プログラムが学生数の15%程度です。このめやすを超える希望者があつた場合は選考を行うことがあります。その結果、一部の学生には第2希望の主プログラムを履修してもらうことになります。

・選考を行う場合

当該主プログラムを第1希望とした学生は、指定された期日までに、当該プログラム担当コースに、学習計画および志望理由を記したレポートを提出します。さらに、当該コースの定めた科目の筆記試験を受験します。このレポートと筆記試験の成績によって受入学生を決定します。各主プログラムの試験科目は以下の通りです。

日本語・日本文学	日本文学史・日本語学を中心とした専門試験
中国語圏言語文化	中国語
英語圏言語文化	英語
仏語圏言語文化	フランス語

上の日程等については、1年次の1月上旬に行われる希望主プログラム申請後、選考が行われる場合のみ、掲示します。

・グローバル文化学環において選考を行う場合

5ページおよびグローバル文化学環のページを参照してください。

主プログラムの選択にあたっては、入学時から十分に考慮して準備を進めるようにしましょう。入学時にボランティアの上級生が履修や大学生活に関するさまざまな相談にのってくれるピア・サポート・プログラムを活用したり、各コース・環の教員が、各学年の担当となって、その学年の学生が卒業するまで、主として学修面での相談の窓口になりますので、学年担任教員または各コースの教員にも遠慮無く相談してください。

2. 日本語・日本文学コース

(1) コースの概要

日本語・日本文学コースでは、日本人の思考と表現の基である日本語、そして日本文化の精髓である日本文学について、古代から現代にいたるまで、幅広くそして深く学ぶことができます。各時代・学問領域にわたって専門的な指導を受け、最終的には、自ら問題を発見し、研究方法を開拓し、深い考察を導くことのできる力を養うことが本コースの目標です。

(2) コア科目

どの外国語を主（第一外国語）とするかについては、コースの規定はありません。興味関心にしたがって、積極的に履修しましょう。『履修ガイド』の説明文をよく読み、必要とされる単位数を正しく把握するようにしてください。

また、2年次以降、日本語・日本文学の主プログラムを選択しようと考えている人は、1年次から、LA科目の日本語・日本文学関係科目を積極的に履修するようにしてください。

(3) 主プログラム

日本語・日本文学の根幹をなす科目群によって構成されています。基礎的学習である概論・通論、通時的学習の文学史、各論を学ぶ講読・特殊研究・特殊講義が、知識の習得に関わる科目群としておかれ、これらは1年次から4年次まで、段階を踏んで履修します。研究方法の習得にあたっては、2年次より用意された各種演習によって学び、これらすべての統合として、4年次に卒業論文を執筆し、自らの研究の総仕上げとします。

1年次には、学科共通科目の「日本文学概説」「日本語学通論」を中心に履修しましょう。また、1年次で履修可能な各種講読類・文学史科目を積極的に履修しておきましょう。2年次以降、専門的な段階へスムーズに進む助けとなります。

2年次以降は、専門性の高い科目が段階を追って用意されています。最終的な目標としての卒業論文を視野に入れながら、3年次の演習の履修によって、自分の専門領域を決定しましょう。

(4) 強化プログラム

強化プログラムは、主プログラムの履修を基盤に、さらに各自の関心を専門的に深化・発展させるためのものとして設定されています。よって、科目群も、高度な内容のものを中心に履修するよう配置されています。とくに、特殊研究や特殊講義といった科目群から、自らの関心に従った履修を計画しましょう。ひとつの専門領域を中心的に履修することも、また時代を横断して幅広く履修することも可能です。4年次での卒業論文執筆を視野にいれながら、自らの専門性を高めましょう。

日本語・日本文学についてより深く学びたい人、また教員免許の取得を希望する人や大学院への進学を希望する人は、主プログラムにあわせて強化プログラムを履修することを強く勧めます。

(5) 教職免許について

日本語・日本文学コースでは、「国語」の中学校教諭一種免許状と高等学校教諭一種免許状を取得することができます。免許状取得に要する「教科に関する科目」は、主プログラム、強化プログラムの卒業要件とは異なりますので、ガイダンスに出席し、配付される冊子を熟読して、必要とされる科目を把握してください。中学校教諭一種・高等学校教諭一種ともに免許状取得には、

中国語圏言語文化コースで開講する「中国古典文学史（先秦～唐）」「中国古典文学史（宋～清）」の2科目を両方とも履修する必要があること、中学校教諭一種免許状取得には、本コース開講の「書道Ⅰ」「書道Ⅱ」の2科目を両方とも履修する必要があることに、特に注意してください。

なお、「教科教育法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」を履修しなければ、4年次に教育実習を行うことができません。教職課程は、段階を踏んだ履修が指定されていますので、ガイダンスや説明冊子の指示にしたがった履修を行ってください。

3. 中国語圏言語文化コース

(1) コースの概要

中国語圏言語文化コースでは、現代中国語のトレーニングを基盤として中国の現代文化および古典文化を学び、中国に対する総合的な理解を深めることを目指しています。確実な中国語運用能力の土台のうえに、様々な分野で活躍しうる人材を育成することを、本コースの目標とします。

(2) コア科目

主とする外国語として中国語を選択し履修してください。1年次に履修する「基礎中国語Ⅰ～Ⅳ」ならびに「基礎中国語（応用）」Ⅰ・Ⅱ、2年次に履修する「発展中国語」のⅠ～Ⅳについては、すべて履修するようにしましょう。また、主に2年次生対象に開講されている「基礎中国語会話」Ⅰ・Ⅱの履修も勧めます。

入学時にすでに初級・中級レベルの学習歴のある学生は、コア科目「中国語プレゼンテーション」Ⅰ・Ⅱの受講も可能です。

他に、英語力も大切なので、きちんと履修して、しっかり勉強しておくようにしてください。また、これ以外の外国語についても積極的な履修を勧めます。

(3) 主プログラム

本プログラムは、学科共通科目、中国語の実践的運用能力を習得するための科目群（専門中国語）、現代語学・言語学および現代文学・現代中国に関する基本的知識および研究方法を習得するための科目群（現代言語文化）、古典語学・文献学および古典文学・古典文化に関する基礎知識および研究方法を習得するための科目群（古典言語文化）、そして卒業論文作成指導の科目群ならびに卒業論文から構成されます。

学科共通科目については、「中国現代文学史」と「中国古典文学史（宋～清）」は、必ず履修しましょう。その他の科目についても、なるべく多く履修して、言語文化に関する幅広い知識を身につけてください。

1年次においては、「中国語ヒアリング基礎」「中国古典文学史（先秦～唐）」（いずれも必修）を履修しておきましょう。

2年次以降、上に挙げた科目の基礎のうえに、「中国語学概論」など、さらに技能や知識を積み上げる多くの科目が用意されています。専門中国語、現代言語文化、古典言語文化という3分野のいずれかに偏ることなく幅広い視点で学ぶと同時に、卒業論文についても、じっくりと時間をかけてテーマを考えるようにしてください。3年次の2月頃に行われる卒論指導の際に指導教員を決め、4年次においては、卒論のテーマによって「中国現代文化特別演習」「中国現代語学特別演習」「中国古典文献特別演習」「中国古典文学特別演習」のうち一科目を選択履修し、卒業論文に取り組みます。

(4) 強化プログラム

主プログラムよりもさらに高度な中国語実践運用能力の習得を目指すための科目群と、現代言語文化、古典言語文化の分野に関する研究技能を強化するための科目群、および大学院との連携を意識した科目「中国言語文化演習」から構成されます。

コア科目の中国語（「基礎中国語（応用）」、ならびに「発展中国語Ⅰ～Ⅳ」）に加えて、主プログラムと強化プログラムに開設されている中国語の運用能力を高めるための科目群をあわせると、質量ともにきわめて充実した中国語の授業を受けることになります。

また、文学と語学、あるいは現代と古典の両方を偏ることなく学ぶのも、本コースの特色です。中国語の運用能力は、中国の文化に対する深い理解に裏打ちされてはじめて大きな力を発揮します。

(5) 教職免許について

本コースにおいては、中国語および国語の教職免許が取得できます。教職に関するガイダンスに出席し、説明の冊子を熟読するようにしてください。

中国語の「教科に関する科目」については、本コースの主プログラムと強化プログラムを選択し、加えて学科共通科目の「中国現代文学史」を修得することによって、必要な単位を満たすことができます。ただ国語については、日本語・日本文学コースが開講する科目を相当数修得することが必要です。計画的に履修するようにしてください。

また、3年次までに教科教育法を履修していないと、4年次に教育実習ができません。

中国語のみで教職免許をとることは、教育実習校を探すのが困難なため、極力避けてください。国語科教育法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳを3年次までに履修のうえ、国語で教育実習を行うように強く勧めます。

主プログラムおよび強化プログラムの主な科目名

	コア中国語科目	専門中国語	現代言語文化	古典言語文化
1年	基礎中国語ⅠⅡⅢⅣ 基礎中国語（応用）	中国語ヒアリング基礎	中国現代文学史 （共通）	中国古典文学史 （先秦～唐） （宋～清）（共通）
2年	基礎中国語会話ⅠⅡ 発展中国語ⅠⅡⅢⅣ 中国語プレゼンテーションⅠⅡ	中国語コミュニケーション・スキル 中国語ヒアリング演習 中国語会話演習 中国語講読 中国語作文基礎演習 中国語作文応用演習	中国語学概論 日中対照言語学 中国語統語論 中国語文法論 中国文化論 中国事情 中国現代作家論 中国現代作品論	中国古典文献講読入門 中国古典文献講読基礎 中国文学古典講読 中国文学古典演習 中国語学文献講読 中国古典詩講義演習
4年	中国言語文化論演習			
4年	卒業論文作成のための特別演習 卒業論文			

4. 英語圏言語文化コース

(1) 到達目標

本コースの到達目標は、(a)英語の高度な運用能力を身につけ、(b)英語という「言語の特質」や英語を介した「文学/文化事象」を研究し卒業論文を「英語で書く」ことで、思考力と発信力を徹底的に磨くことです。

(2) コア科目

『履修ガイド』の説明をよく読んで必要とされる単位数を正しく把握し、それに従って履修してください。

外国語科目は、余分に取得したものが自由選択科目として認定されますから、所定の単位にこだわらずに積極的に履修してください。

(3) 主プログラム (44 単位)

学科共通科目：1年次に「英語圏言語文化入門(1)(2)」履修。英語学専攻の可能性のある学生は、1年次にさらに「言語学入門Ⅰ(1)(2)」と「言語学入門Ⅱ」を履修。これらを含めて8単位(4年間で)。

専門科目：下の3分類を十分理解して各カテゴリーの単位を満たしてください。またⅠ、Ⅱは、留学などの特別の理由がない限り、この順序で履修してください。ただし、「特殊講義」はこの限りではありません。

必修科目：各学年次で履修しておくこと。

準必修科目：選択科目ですが、専攻しようとする領域（英語圏文学/文化または英語学）に応じて、学んでおく必要がある科目なので、当該領域の必修科目として履修しておくこと。

選択科目：専攻しようとする領域に応じて、できるだけ多く履修しておくこと。余剰単位は自由選択科目として認定されます。

1年次	必修科目 選択	英文法Ⅰ(1)(2)とⅡ 英語圏言語文化研究Ⅰ		
2年次	必修科目 準必修科目 選択	英作文演習(初級)、英会話演習(初級)、英米文学演習(初級) (英語圏文学/文化) 英文学史Ⅰ(1)(2)とⅡ (英語圏文学/文化) 英語圏テキスト研究入門(1)(2)、英文学特殊講義Ⅰ～Ⅶ、 英語圏言語文化研究Ⅰ～Ⅲ	(英語学) 英文法演習、英語学入門(1)(2)、英語学概論、英語音声学演習 (英語圏共通) 英作文演習(中級)、英会話演習(中級) (英語圏共通) 英語圏事情(1)(2)	
3年次	必修科目 準必修科目 選択	対照表現学演習Ⅰ(1)(2)とⅡ (英語圏文学/文化) 米文学史Ⅰ(1)(2)とⅡ 特別演習(英米文学研究法論)Ⅰ(1)(2)とⅡ (英語圏文学/文化) 英語圏テキスト研究入門(1)(2)、英文学特殊講義Ⅰ～Ⅶ、 英語圏言語文化研究Ⅰ～Ⅲ	(英語学) 特別演習(言語研究法論)Ⅰ(1)(2)とⅡ (英語学) 英語学特殊講義Ⅰ～Ⅶ	(英語圏共通) 英語圏事情(1)(2)、第二言語教授法研究
4年次	必修科目 準必修科目 選択	卒業論文 (英語圏文学/文化) 特別演習(作品分析) (英語圏文学/文化) 英語圏テキスト研究入門(1)(2)、英文学特殊講義Ⅰ～Ⅶ、 英語圏言語文化研究Ⅰ～Ⅲ	(英語学) 特別演習(言語資料分析) (英語学) 英語学特殊講義Ⅰ～Ⅶ	(英語圏共通) 英語圏事情(1)(2)、第二言語教授法研究

(4) 強化プログラム (20 単位)

主プログラムで提供している科目に加えて、以下の 4 科目の専門科目と、隣接領域から 8 科目が提供されます。このうち新たに加わった専門の 4 科目は、卒業論文を書くための「準必修科目」として、次の要領で履修することが望まれます。

2 年次	準必修科目	(英語圏文学／文化) 英米文学演習(中級)、英米文学演習(上級)(1)(2)
3 年次	準必修科目	(英語圏文学／文化) 英米文学演習(上級)(1)(2)

(5) 教職免許について

本コースでは、「英語」の中学校教諭一種免許状と高等学校教諭一種免許状を取得することができます。免許状取得に要する「教科に関する科目」は、主プログラム、強化プログラムの卒業要件とは異なりますので、ガイダンスに出席し、配付される冊子を熟読して、必要とされる科目を把握してください。

なお、「英語科教育法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ」を履修しなければ、4 年次に教育実習を行うことができません。教職課程は、段階を踏んだ履修が指定されていますので、ガイダンスや説明冊子の指示にしたがった履修を行ってください。

学年	科目	単位数	履修年次
1 年次	英語圏文学／文化	2	1 年次
1 年次	英米文学演習(中級)	2	1 年次
1 年次	英米文学演習(上級)	2	1 年次
2 年次	英語圏文学／文化	2	2 年次
2 年次	英米文学演習(中級)	2	2 年次
2 年次	英米文学演習(上級)	2	2 年次
3 年次	英語圏文学／文化	2	3 年次
3 年次	英米文学演習(中級)	2	3 年次
3 年次	英米文学演習(上級)	2	3 年次
4 年次	英語圏文学／文化	2	4 年次
4 年次	英米文学演習(中級)	2	4 年次
4 年次	英米文学演習(上級)	2	4 年次

5. 仏語圏言語文化コース

(1) コースの概要

フランスは 17 世紀以来、ヨーロッパの政治と文化の中心でした。そして 20 世紀の後半になってフランスはドイツとともに「欧州連合 (EU)」の創設に深く関わり、現在でもヨーロッパ全体に大きな影響力を発揮しています。したがって、フランスの文化と社会を考える時にはヨーロッパ全体を視野に入れること、逆にヨーロッパ全体の問題を考える時にはフランスを一つの中心核とすることは大きな意義があります。

また、フランス語を公用語とする国はフランス以外にも、ヨーロッパ(スイス、ベルギーなど)、アフリカ(セネガル、カメルーンなど)、北米(カナダ)などにも広がっています。これらの世界のフランス語圏の国々の文化や社会にも視野を広げます。

学習するテーマは、狭い意味での言語文化だけではなく、映画から思想まで、ファッションから移民問題まで、幅広くフランス語圏の文化と社会を学びます。

さらに、フランスの文学や芸術は明治期から我が国に大きな影響を与えてきました。また日本の浮世絵や工芸品などはフランスの芸術の中に吸収されて「ジャポニスム」の成立を促しました。近年では日本の漫画やアニメがフランスの若者を中心に人気があり、日本のポップカルチャーの見本市「ジャパン・エキスポ」は毎年多数の入場者を集めています。

(2) コースの教育目標

教育目標は一言で言えば、「国際化した現代社会に対応できるような人材を養成すること」ですが、より具体的に言えば次のようになります。

- 1 フランス語の専門的知識と実践的運用能力を身に付けます。
- 2 フランス語で営まれている様々な文化現象を理解します。
- 3 言語文化だけではなく、幅広くフランス語圏の文化と社会を学びます。
- 4 ドイツ語圏文化を始めとして、ヨーロッパの他の国の文化や、あるいは世界のフランス語圏の文化にも視野を広げます。
- 5 日仏交流、日欧交流などの異文化交流にも関心を持ちます。

(3) 履修の全般的な注意

本コースのカリキュラムは、新しく入学してくる皆さんが、フランス語をまだ全く学習していないことを前提として組まれています。1, 2 年次には可能な限りたくさんのコア科目のフランス語に関する授業を履修して、フランス語の基本的な知識や能力を身に付けてください。

2 年次以降はコースの専門科目において、作文や会話の力を伸ばすとともに、時事フランス語やビジネスフランス語から文学や思想のテキストまで、多様なフランス語を学ぶことになります。

本学と協定を締結しているフランスの大学に留学すれば、卒業年度を遅らせることなしに留学することも可能です。

「卒業論文」(8 単位) 及びその「研究指導」(2 単位) は 4 年次において必修です。

(4) 主プログラム (44 単位)

本プログラムは、上記のような本コースの教育目標をプログラムの全体において実現するために、以下のような 5 つの科目群から構成されています。このうちから 44 単位履修してください。

- 1 言語文化学科共通科目として、ヨーロッパ、英語圏、中国、日本の言語文化の諸相を学

- (4) びます（8単位必修）。また「仏語圏言語文化基礎演習」を履修し、フランス語圏の言語文化に関する基礎的知識を身につけます（2単位必修）。
- 2 フランスの周辺国（特にドイツ語圏の国々）を中心として、広くヨーロッパの言語や文化についての知識を獲得します。
- 3 フランス語圏の文化や社会について知見を得ます。
- 4 フランス語の運用能力を高めます。
- 5 フランスの文学や思想を分析します。

言語文化学科共通科目のなかの「ヨーロッパ言語文化論」はフランスを中心としたヨーロッパの言語文化に関する講義で、本プログラムに密接に関連する授業科目です。「仏語圏言語文化基礎演習」は専門科目を履修するための基盤となる内容を扱いますので、本プログラムへの進学を考える方はできるだけ1年次に履修してください。また進学前の1年次から履修可能な専門科目が用意されています。これらの科目は1年次に履修することを勧めます。

(5) 強化プログラム（20単位）

本プログラムの教育目標は、主プログラムで学んだ幅広い知見を基礎にして、さらに各人の関心に応じて、自分が学習したい領域をより集中的に深く学ぶことです。そのことによって、より専門的な知識や、より高い語学能力を身につけることを目指します。

本プログラムは、主プログラムを構成する5つの科目群のうちの、言語文化学科共通科目と「仏語圏言語文化基礎演習」を除いた4つの科目群から構成されています。このうちから主プログラムで履修した科目を除いて、さらに20単位履修してください。なお、主プログラム44単位を超えて取得した単位は、学科共通科目を除いて、この強化プログラムの単位に充当されます。

人間社会科学科

1. 学科の概要

(1) 教育の目標

本学科は、人間について深い理解をもち、その理解を現実的な場面で役立てていける人を育てるための教育と研究を行います。本学科には、教育科学・社会学・子ども学を中心とした多彩な授業科目があり、学生が、こうした幅広い視点から人間を捉え、人間に対する総合的な理解を得ることを目指しています。同時に、本学科の学生は、2 年次に進学する際に教育科学・社会学・子ども学主プログラム、またはグローバル文化学主プログラムを選択します。主プログラムに加えて3 年次に進学する際に同名の強化プログラムを選んだ学生は、それぞれの分野を専門的に学び、それに関する深い知識と研究手法を身につけることになり、主プログラムに加えて違う分野の副または学際プログラムを選んだ学生は、教育科学、社会学あるいは子ども学を中核とする学際的な研究を進めることとなります。

(2) 学科共通科目

「人間と発達」「人間科学論」「社会学総論」「子ども学総論」の中から3 科目以上を履修する必要があります。「人間と発達」は教育科学の、「社会学総論」は社会学の、「子ども学総論」は子ども学の概要をつかむのに適した科目です。

(3) 主プログラムの選択

各主プログラムの履修者の上限は、原則として教育科学が22 人、社会学が14 人、子ども学が14 人です。この上限を超える希望者があった場合は、選考を行い、一部の学生には第二希望の主プログラムを履修してもらうことになります。選考の方法は次のとおりです。

教育科学：教育科学主プログラムを第一希望とする者については、1 年次前期の「人間と発達」の成績を中心に、必要に応じて他の科目の履修や成績も考慮し、履修者を決定します。第二希望以下の者についても同様です。

社会学：社会学主プログラムを第一希望とする者については、1 年次前期の「社会学総論」の成績を中心に、必要に応じて他の科目の履修や成績も考慮し、履修者を決定します。第二希望以下の者についても同様です。

子ども学：子ども学主プログラムを第一希望とする者については、1 年次前期の「子ども学総論」の成績を中心に、必要に応じて他の科目の履修や成績も考慮し、履修者を決定します。第二希望以下の者についても同様です。

なお、グローバル文化学主プログラムの上限定員はプログラム申請学生数の15%程度で、選考方法は5 ページおよびグローバル文化学環のページに説明があります。

(4) 教職課程の履修

本学科の学生は幼稚園、小学校、中学校（社会科）および高等学校（公民科）の教員免許状を取得できます。

2. 教育科学コース

(1) 履修計画

教育科学研究の特徴の一つは、哲学、歴史学、社会学、行政学など、多様な方法論を用いて人間の発達にかかわる問題にアプローチしていくところにあります。したがって、他学科・他コースの科目も視野に入れて履修計画を立ててください。

(2) コア科目

所定の最低単位数にとらわれず、広く、ただし照準を定めて学んでください。外国語は、英語のほかに未修の外国語も積極的に学んでください。同一の言語を2年以上にわたって履修することが望ましいです。

(3) 主プログラム

教育科学主プログラム（48単位）は次のように履修することになっています。

学科共通科目：1年次に「人間と発達」を含む3科目を選択して履修する。

教育実地研究Ⅰ・Ⅱ：それぞれ1・2年次に履修する（必修）。

社会学・子どもコースの科目：指定された科目の中から3科目を選択して履修する。

概論：3科目以上を選択して履修する。

特殊講義：2科目以上を選択して履修する。

演習：2～4年次に6科目を選択して履修する。

教育科学研究指導：Ⅰは3年次、Ⅱは4年次に履修する（必修）。

卒業論文：4年次に履修する（必修）。

教育科学の各領域の概論・特殊講義・演習を選択して履修していくことになります。まず概論によって基本的な認識をもち、特殊講義によってその分野の個別的、具体的な内容に触れ、演習によってさらに深めてください。概論を履修せずにいきなり演習に臨むのは望ましくありません。また、特殊講義には専門的な内容も含まれますので、特に1年次で履修する場合は、興味関心のあるものに限定し、十分に予習・復習しながら履修してください。

概論は毎年開講されますが（一部は隔年）、特殊講義と演習は、同じ領域の科目が隔年で開講されます（例えば教育思想特殊講義と教育人間学特殊講義）。また「教育科学」という名称の概論・特殊講義・演習は、新しい科目を前年度以前に入学した学生も履修できるようにする場合など、必要に応じて開講します。

演習は、原則として同一の科目のⅠとⅡを連続して（4単位）履修してください。

(4) 強化プログラム

強化プログラム（20単位）は、主プログラムで履修した科目に加えて、概論、特殊講義、演習または教員免許取得にかかわる科目を履修するものです。

主プログラムで履修する科目が、自分の関心に直接かかわる領域の概論・特殊講義・演習であるとするれば、強化プログラムで履修するのは、関心を広げて自分の土台をより強固にする領域の概論・特殊講義・演習となるはずです。単なる単位数の確保ではなく、何を学ぶために何を土台にしたいのかを考えて、科目を選択してください。

3. 社会学コース

(1) 教育目標

社会学プログラムは、理論的ないし実証的方法により、人間の意識と行動の社会的側面、およびその基盤をなす社会の構造と変動を多角的に分析・考察し、人間や社会を広く根本的に見通す力量を育てることを目標としています。社会学の基礎理論と研究方法、および社会意識、ジェンダー、社会政策、文化人類学などの主要な研究領域に対応する科目、および教育社会学、子ども社会学、地理学などの隣接領域に関する科目を用意し、学生それぞれが持つ社会に対する関心を育てることを目指しています。社会学はそもそも学際的性格が強いので、哲学・文学・地理学・歴史学、教育科学・心理学・統計学、政治学・経済学・法学など、主体的に幅広い知識を身に付けることも推奨します。

(2) 社会学の主プログラム

学科共通科目の中の社会学の導入的講義である「社会学総論」（1年次）、社会調査の全過程を習得する「社会調査法」（2年次以上）、そして「社会学研究指導Ⅰ・Ⅱ」と卒業論文の計18単位を必修としています。学科共通科目からは更に2～3科目を履修します。他に、「ジェンダー社会論」、「現代社会論」、「現代生活論」、「社会政策論Ⅰ・Ⅱ」、「社会問題論(1)(2)」、「社会調査の設計と実施」などの社会学・文化人類学の講義科目、教育社会学の概論や特殊講義、地理学コースや生活科学部人間生活学科生活社会科学講座の指定の講義科目から14～16単位、「ジェンダー論演習Ⅰ・Ⅱ」や「社会保障論演習Ⅰ・Ⅱ」、「社会意識論演習Ⅰ・Ⅱ」、「文化人類学演習Ⅰ・Ⅱ」などの社会学・文化人類学の演習科目と教育社会学・子ども社会学の演習科目から10～12単位を選択し、必修と選択で計48単位を履修します。

講義科目で基本的な社会学および隣接諸科学の知識を習得し、演習科目でそれらの知識の応用能力や発展的な思考能力を養成します。「社会学研究指導Ⅰ」（3年次）で卒業論文に向けて自らの問題関心を深め、4年次にはその問題関心に基づき、指導教員（4年次進学時に決定）の下で卒業論文の具体的なテーマを決定します。「社会学研究指導Ⅱ」では調査や分析を進めつつ、教員や学生全員の前で研究発表と質疑応答を行います。そして最終的に、自ら設定した具体的なテーマについて卒業論文を完成させます。

(3) 社会学の強化プログラム

強化プログラムでは、主プログラムで習得する社会学の基礎知識と学際的広がりを基盤として、より集中的に社会学の講義・演習を履修することにより、専門性を深めると同時に社会学の広がりを包括的に身につけます。主プログラムに加えて、社会学・教育科学・生活社会科学関連の講義科目14単位を履修することでより幅広く学習し、また社会学の演習科目6単位を履修することで、反省的・批判的思考をより深く養成することを目的としています。

(4) 社会調査士資格

社会学の主プログラムには、社会調査士資格取得に必要な認定科目6科目14単位が含まれています（2018年度現在；認定科目は毎年度変わることがあるので2019年度以後はあくまで予定）。認定科目を指定の方法で14単位履修すると、卒業時に社会調査士資格を取得申請することができます。在学生でも、一定の条件を満たすと、3年次以上で社会調査士キャンディデイト（資格取得見込み）認定を正式に受けることができます。

4. 子ども学コース

I. 子ども学プログラム

(1) コースの概要

子ども学コースでは、乳幼児期～児童期の子どもを取り巻く問題、子ども観と社会・文化との関係性を問い、人間、社会、文化の生成過程およびその構造についてミクロとマクロの視点から探究する力を培うことを目標としています。子ども学には、発達論、教育社会学、幼児教育学、教育制度論、保育学、人間学等の複合的な領域からのアプローチが必要です。それを基礎に、子どもが生活する乳幼児教育の現場（学内外の保育・教育施設）に触れる機会を活かし、理論・対話・実践をとおして、リアルな子ども像を見据えた子ども学を各自が修得していくことを目指します。

(2) コア科目

コア科目の必修単位は 32 単位です。コア科目は子ども学を専門的に学修・研究するための基礎を培う授業でもあるので、学際的な知識や視点を身につけられるようにしっかりと学びましょう。外国語は、英語に加えて未修の外国語を積極的に履修してください。同一の言語を 2 年以上にわたって履修することが望ましいです。

幼稚園の教員免許の取得を希望する場合、外国語、「法学 I（日本国憲法）」「情報処理演習(1)(2)」 「スポーツ健康実習」は、免許取得のためにも必修の科目です。

(3) 主プログラム

子ども学主プログラム（48 単位）は、子ども学の基礎、発展、演習、実習系科目と研究指導・卒業論文、および近接領域の科目から構成されています。

- ・学科共通科目：1 年次に、「子ども学総論」を含む 6 単位を選択して履修する。
- ・子ども学コースの基礎、発展科目：概論・特殊講義系の科目から、1～3 年次に 10 単位以上を選択して履修する。
- ・子ども学コースの演習科目：2～4 年次に 12 単位以上を選択して履修する。
- ・子ども学コースの実習系科目：「子ども学フィールドワーク」は 2 年次以降、「子ども学インターンシップ」は 3 年次以降に履修できる。少なくとも一方は履修する。
- ・子ども学研究指導：I は 3 年次、II は 4 年次に履修する（必修）。
- ・卒業論文：4 年次に履修する（必修）。
- ・社会学・教育科学コースの科目：指定された科目の中から 6 単位選択して履修する。
- ・近接領域・特別設置科目：指定された科目の中から 0～2 単位選択して履修する。

まず、「子ども学総論」「幼児教育方法学概論」「幼児教育課程概論」「子ども社会学概論」「幼児教育制度概論」「保育内容総論（子どもと遊び）」をはじめとする基礎科目によって、子ども学に関する基本を学びます。そして、「幼児教育学原論」「子ども発達論」「人間関係論」「子ども学特殊講義」といった発展科目によって個別的、具体的な内容に触れます。さらに、演習科目によって専門的な内容を深め、研究指導をとおして卒業論文へとつなげていきます。

また、「子ども学フィールドワーク」「子ども学インターンシップ」では、理論の基礎を修得したうえで、実践の場に臨み、子ども学や保育・幼児教育に関する学習を重ねます。

基礎科目や発展科目の多くは毎年開講されますが、一部は隔年開講です（例えば、幼児教育方法学概論、幼児教育課程概論など）。演習は、同じ担当教員の科目が交互に開講されます（例えば、幼児教育学演習と保育学演習など）。

(4) 強化プログラム

子ども学強化プログラム（20 単位）は、社会や地域や家庭における子育て、教育について考えるとともに、その一翼をになう実践力と発想力を培うことを目標としています。

主プログラムで履修した科目に加えて、子ども学コースの基礎、発展、演習科目から 8 単位以上、教育科学コースの演習・実習科目から 0～4 単位、近接領域科目や特別設置科目等から 4 単位以上、幼稚園教職関連科目から 0～8 単位選択、計 20 単位以上を選択して履修します。子どもや保育・幼児教育に関して、さまざまな観点から展開される講義、演習、実習があり、それらの科目から自由に組み合わせて履修することができますので、自分の関心をさらに広げるとともに深めていくにはどの科目を履修するとよいか、十分に考えて科目を選択してください。

＊ 専門科目のうち、「乳幼児教育論 V」「子ども学ゼミ V」「乳幼児の世界 I」「乳幼児の世界 II」「子ども学研究法 II」「子ども学研究法 III」は、現職の社会人と共に学ぶ特別なプログラムです。不定期の開講で、かつ 2021 年度以降は開講されませんので注意してください。（2019 年度は、「乳幼児の世界 II」が開講されます。その他、生活科学部特別設置科目の「子ども学ゼミ VI」も、専門科目ではありませんが同様に社会人と共に学ぶ子ども学系の科目です。）

(5) 教員免許状の取得

子ども学プログラムには、幼稚園教員免許を取得するために必要な科目が含まれています。所定の科目を履修し、手続きをすると、卒業と同時に幼稚園の教員免許を取得することができます。小学校、中学校社会科、高等学校公民科の教員免許の取得を希望する場合は、教育科学コースや社会学コースで開講している所定の科目も履修する必要があります。

幼稚園教員免許の取得を希望する場合は、履修にあたって次のことに留意してください。

- ・学科共通科目で 6 単位選択するなかに、「教職概論(1)(2)」「人間と発達」を必ず含めること。
- ・子ども学強化プログラムに含まれている幼稚園教職課程に関する科目で指定されたものは、必ず選択すること。
- ・教職課程の科目は、ほとんどが隔年で開講されるため、1 年生のうちからしっかりと 4 年間を見通した履修計画を立てて学修すること。

芸術・表現行動学科

1. 学科の概要

(1) 教育の目標

芸術・表現行動学科では、現代社会の中で多様化している芸術及び身体表現行動を総合的に捉えるために、理論的側面と実践的側面との両面から研究を行います。具体的には、音楽や舞踊といった芸術表現と、両者に深く関わる人間行動とを、社会生活との密接なつながりの中で考えることを学び、人間の心と身体、感性と個性などの普遍的な問題への現代における対応を模索しています。

(2) コース（専修プログラム）の決定

本学科では、舞踊教育学と音楽表現の4年一貫の専修プログラムを設け、入学時に決定したコース（プログラム）へ進みます。複数プログラム選択履修制度をとらず、第二のプログラムの選択はありません。なお、他学科の学生が、第二、第三のプログラムとして履修することのできる「舞踊教育学副プログラム」「音楽表現副プログラム」を開設しています。

(3) 学科共通の注意事項

本学科は、1年次から舞踊教育学、音楽表現それぞれに基本的な実技科目や専攻科目があります。さらに研究分野は多岐にわたりますので、コア科目などからも自らの研究分野に関連した科目を数多く履修することが必要な場合があります。1年次から4年間を見通した履修計画を組むことが求められます。

(4) 副プログラムの履修

自由選択で、他学科及び他学部が提供している副・学際プログラムを「第三のプログラム」として履修することができます。選択できるプログラムには制限がありますので、『履修ガイド』で確認してください。

2. 舞踊教育学コース

(1) 履修計画

舞踊教育学はその対象、方法が多岐にわたり、多くの学問分野と関連をもった学際的な性格を備えています。履修計画を立てる際には、コースで開講している専攻科目やコア科目以外に、他学科・他コースの科目も含めて検討してください。特に関連の深い科目は、関連科目として専攻科目の単位に含めることができるようになっていきます。

専攻科目の中には、毎年開講するとは限らないものがあるので、計画的に履修してください。

(2) コア科目

基礎講義等においては特定の分野に偏らず広範囲の授業科目を履修することにより、自らの研究分野を絞り込んでいくために必要な知識や考え方を身につけていくことが望ましいです。文理融合リベラルアーツを履修して領域横断的な視野を身につけることも有用です。

コア科目は自由選択科目としても履修できますので、特に教職を希望している場合には、生涯スポーツの中から、専攻科目として開講されていない運動種目を積極的に履修してください。

(3) 専門科目

専攻科目は原則として指定された学年次に履修してください。とくに実技実習科目は人数を制限することがあるので、やむを得ない場合を除いて学年指定を厳守してください。

舞踊教育学では3年後期から卒業論文に着手しています。専門科目(選択)における演習または実験演習の中から、下記の科目の中から3科目以上を履修することが必要です。

舞踊芸術学実験演習(1)および(2)

民族舞踊学実験演習(1)および(2)

臨床舞踊論実験演習(1)および(2)

動作学実験演習(1)および(2)

スポーツ文化論演習(1)および(2)

なお、上記の科目のうち、卒業論文の指導を希望する教員が担当する科目は、原則として3年前期に履修してください。これを履修していない場合には、卒業論文にとりかかれないことがあります。

舞踊創作法実習(舞踊上演・制作)では、舞踊実技の集大成として舞台上での発表を行います。これを履修する前に、専門科目(選択)における舞踊の実技実習科目を積極的に履修しておいてください。

3. 音楽表現コース

(1) コースの概要

音楽表現コースは、音楽学と演奏学(ピアノ・声楽)の専門分野に分かれています。1、2年次では、ソルフェージュ、作曲原論、ピアノ基礎、声楽基礎などの基礎実技科目、音楽学概論、および、西洋音楽史Ⅰ、Ⅱ、音楽学研究法、日本音楽史概論、並びに3年次の民族音楽学などの音楽学関係科目が必修となっています。

音楽学、ピアノ、声楽など、各分野のより高度な専門科目は主として3年次、4年次に履修することになりますが、単に専門技術や知識の修得にならないように、本学の特色を生かして、他のコース等の関連する科目などを履修することが望ましいです。

なお、本コースは複数プログラム選択制をとりませんが、自由選択の第三のプログラムとして、他のコース・環が提供する副プログラムを履修することはできます。

(2) コア科目について

本コースは、音楽に関する多面的、総合的な知識を培うことを目指していますので、できるだけ広範囲の分野にわたって履修することが望ましいです。

また、外国語については、英語の力を十分に養うことと、ドイツ語、フランス語、イタリア語などの西洋諸語や、西洋古典語(ラテン語、ギリシャ語)あるいはアジア諸言語を学ぶことが望ましいです。

(3) 専門科目の履修

コースの必修科目は配当学年において速やかに履修し、2年次、3年次以降の専門科目についても、授業内容によって開講科目の名称が変わりますので、よく注意して履修してください。

4年次には下記の卒業研究が必修となりますので、各自の専門分野での研究内容について、3年次のあいだに教員と相談してください。

(4) 卒業研究

音楽表現コースでは卒業研究が必修で、次の4つの選択が可能です。

① 音楽学：卒業論文

② 音楽学：卒業論文と卒業演奏(ピアノまたは声楽)の両方

③ 演奏学：卒業論文と卒業演奏(ピアノまたは声楽)の両方

④ 演奏学：卒業演奏(ピアノまたは声楽)

これらの選択は、4年次の最初の「卒論題目提出」時に決定し、変更はできません。

グローバル文化学環

(1) グローバル文化学がめざすもの

グローバル文化学環がめざすのは、文化の差異を理解し、大切にしながら、その差異を超えて協働し、何かを共に創り出すような、グローバル化時代の新しい市民を育てることです。授業や、そこでの教員・学生仲間とのコミュニケーションを通じて、皆さんは、国際協力や、国際化するビジネス・学校教育・地域社会等の場などで活躍するために必要な知識と態度を身につけることができます。従来の専門コースとはちがって、学部や学科を超えて開かれたコースをめざしています。その気持ちをこめて、「環」と名付けました。

(2) 主プログラムと副プログラム

グローバル文化学主プログラムは、人文科学科、言語文化学科、人間社会科学科のいずれの学科の学生もこれを選択することができ、この主プログラムを履修する学生はグローバル文化学環に所属することになります（学籍は入学時の学科のままです）。

グローバル文化学を主プログラムとして履修する学生はこのプログラムから 44 単位以上を履修し、さらに自分の所属する学科のいずれかのコースが提供する副プログラム又は教育・子ども学学際プログラム（20 単位以上）を第二のプログラムとして履修します。つまり、グローバル文化学環の学生は、「グロ文」（これが略称です）を主たる専攻としながら、他の副又は学際プログラムを副専攻とし、学際的な学修をすることが特徴です。このため、他の主プログラムと違って、グロ文の強化プログラムは設けられていません。また第二のプログラムとして、他の学科のプログラムを選択することはできません。第三のプログラムとして、自分の所属する学科・学部以外のプログラムを選択することはできます（以上の主・副・学際）のプログラム選択については『履修ガイド』の表を参照）。

なお、第一のプログラムとして他の主プログラムを選択した学生が、第二あるいは第三のプログラムとして履修するための、グローバル文化学学際プログラムが設けられています（本冊子 53 ページ参照）。

(3) コア科目について

4 ページの表にしたがって履修します。どの学科に所属する場合でも、グロ文を主プログラムとする場合は、グロ文の欄の外国語の単位数（20 単位）を履修してください。英語、ドイツ語、フランス語、中国語のうち、一つの言語について 8 単位修得すること。残りの 12 単位は第一外国語もしくは異なる言語から修得し、あわせて 20 単位以上としなければなりません。ただし第一外国語として選択した言語で満たすことのできる外国語の必修単位は 12 単位が上限です。主とする言語以外の言語には、上に挙げたほか、ロシア語、朝鮮語、スペイン語、イタリア語、アジア諸語も含まれます。

3 年次以降も、上級英語、ビジネス英語、時事英語、ACT プログラムの履修などで持続的に力をつけてください。お茶大の海外語学研修や交換留学など現地で学ぶことを奨励します。文理融合リベラルアーツの科目群のなかには、グロ文の学習の基礎や導入になる科目があります。

(4) 主プログラムについて

主プログラムとして、以下の a－h の系列科目を履修します。授業科目は、グロー文の専任教員のほか、文教育学部の他のコースや生活科学部の教員も担当しています。

a－学科共通科目 自分の所属する学科の下記の学科共通科目から 2 科目 4 単位を履修します。各学科の学習の基礎となるものですので、1－2 年次に履修することを勧めます。

- 人文科学科 哲学基礎論、倫理学基礎論、美術史基礎論、比較文化史、比較社会史、人間と空間、自然と人間
- 言語文化学科 日本文学概説、日本語学通論、中国現代文学史、中国古典文学史（宋～清）、英語圏言語文学入門(1)(2)、言語学入門I(1)(2)・II、ヨーロッパ言語文化論I・II
- 人間社会科学科 社会学総論、人間と発達、人間科学論、子ども学総論

b－基礎科目 1－2 年次から履修し、8 単位以上を選択履修。

グローバル化によって、国家を単位とした政治、経済、文化はどう変わりつつあるのか、グローバル化という現象の全体像を、様々な切り口から学ぶ科目です（「グローバル文化学総論」などを、1 年次から履修できます）。また、グロー文の専門教育科目の 3 つの柱となっている地域研究・地域文化（c 系列）、多文化交流・多文化共生（d 系列）、国際関係・国際協力（e 系列）の基本となる科目もあります。

c－地域研究・地域文化 2 年次から履修し、4 単位以上を選択履修。

地域や文化を理解（comprehension）する科目群で、グローバル化によって、地域の社会や文化がどのように変わってきているのかを、アジア太平洋を中心としたさまざまな文化圏をとりあげて考えます。

d－多文化交流・多文化共生 2 年次から履修し、4 単位以上を選択履修。

地域や文化をこえた交流（communication）を学ぶ科目群で、国内外での多様な接触や交流が個々人の行動にどのような影響を与えるか、言語的・心理的な側面も加味して考えることにより、相互理解と協調・共生にはなにが必要かを、知識と実践の両面から学びます。

e－国際関係・国際協力 2 年次から履修し、4 単位以上を選択履修。

地域や国家をこえた協力（collaboration）を学ぶ科目群で、政治、経済、社会、文化の諸領域にわたる、国家、国際機関、企業、NGO/NPO、個人などのさまざまな活動や役割を学び、国際関係・国際協力のあり方を探ります。

f－実習 主として 2－4 年次に履修し、4 単位以上を選択履修。

グローバル化の問題を理解するには、現場に出かけ、自らの身体や五感をフルに使って、考えることが必要不可欠です。地域理解や文化間の交流や国際協力を、実際の現場で考えることが、この実習の目的です。カリキュラムの三つの柱にそって 3 種類の実習が用意され、「多文化交流実習」と「国際協力実習」は、事前学習と現地での実習がセットになり前者は 2 科目（4 単位）後者は 3 科目（6 単位）となっています。「地域研究実習」は、国内のさまざまな場所での複数の実習から構成されています。

g－研究法

卒業研究を行うときに必要となる文献研究、社会調査、フィールドワークなどの方法を学ぶ科目です。「グローバル文化学方法論」は、2 年次に履修する必修に準じる科目です。

h－卒業研究 必修

4 年間学んだ成果が「卒業研究」で、その中身は、文献に基づく論文でも、国内や海外でのフィールドワークの成果にもとづくものでも構いません。指導教員とコミュニケーションをしながら、それぞれの個性が発揮されたオリジナルな卒業研究を創りあげてください。「グローバル文化学特論」は、3 年次に履修し、卒業研究の予備的な学習を行うもので、必修科目です。卒業研究をつくる過程とその成果発表にあたっては、専任教員全員が参加して、助言し、評価を行ないます。

グローバル文化学主プログラム履修単位表

	学科共通 科目	専門基礎	地域研究・ 地域文化	多文化 交流・共 生	国際関係・ 国際協力	実習	卒業研究 グロー文特論
主プログラム 44	4	8 以上	4 以上	4 以上	4 以上	4 以上	10

(5) 学科内の副プログラムの履修について

グローバル文化学環に所属する学生は、第二のプログラムとして、自分が所属する学科のいずれかの副プログラム又は教育科学・子ども学学際プログラム（人間社会科学科のみ）（20 単位）を履修する必要があります。副プログラムの概要は、本冊子の 49 ページ以下に説明がありますので、それを読み、それぞれのプログラムの規定にしたがって履修してください。副プログラムの選択は、3 年次に進学するときに決定しますが、1－2 年次のうちから、学修計画をたてて、当該の科目を履修しておくことを勧めます。

(6) 主プログラムの選択について

6.1 主プログラムの申請と選考

グローバル文化学を選択できる上限定員は、人文科学科、言語文化学科、人間社会科学科の学生数（申請者数）の 15% 程度（人数の小数点以下は四捨五入）とします。各学科の選択希望者が、上限定員の枠内であれば全員が選択できます。上限定員枠をこえた場合は、「グローバル文化学総論」などの成績、志望理由書、面接によって選考します（5 ページを参照）。グローバル文化学を主プログラムとして選択することを希望する学生は、申請前に、必ず志望理由書を提出し、面接をうけてください。

6.2 芸術・表現行動学科や他の学部から志望する場合は、転学科・転学部の手続きとなります。いずれの場合も、文教育学部の主プログラム申請時に応募します（いずれかの学科を選びその学籍をもちます）。

副・学際プログラム紹介

副・学際プログラム紹介

1. 哲学・倫理学・美術史副プログラム

哲学・倫理学・美術史副プログラム（20単位）は、それぞれの分野において、基礎論・概論・特殊講義などがあります。基礎論・概論においては主として基礎的な知識やものの見方を習得します。特殊講義においては主として専門的応用的な知識やものの見方を習得します。興味や関心を中心として分野を考慮し、体系的計画的な学習を心がけてください。

2. 比較歴史学副プログラム

比較歴史学主プログラムを専攻しない学生に向けて、歴史学のエッセンス、すなわち歴史を構成する基本的な地域・時間軸を理解し、歴史学の基礎的な研究方法を身につけることを目指します。授業科目は日本史、アジア史、西洋史の3つの分野から構成されています。すべての学問領域には、その「歴史」があるといって過言ではありません。自分の専攻領域、あるいはフィールド（地域）についての歴史的知識を得ることは、主プログラムを履修する上でも有益です。たとえば、日本文学や倫理・思想を考究する上で、日本の歴史についての基礎的な知識は大いに役に立つでしょうし、ヨーロッパの文学や社会に関心を持っている人には、ヨーロッパ史の知識がある程度必要でしょう。自分の主たる専攻領域についての知見の幅を広げるのに、本プログラムは適しています。

また、本プログラムは、20単位以上を履修することのみを必修とし、細かな履修規定を設けていませんが、それはただ漫然と単位だけ集めることをよしとしているのでは決してなく、エントリーする学生の志望に沿った履修計画を立ててもらうために自由度を高めているからです。

実際には、入門型授業である「比較社会史」「比較文化史」および3つの分野の概説（計6科目）から4～6単位、中級授業の研究法・講読などから4～6単位、各分野の特殊講義から4～6単位、そしてできれば演習を通年で4単位以上取得することを勧めます（ただし、演習を受講するには授業についていくだけの基礎学力と意欲が不可欠です）。その科目選択は自由です。日本史ばかりですべての科目を履修することも可能ですし、中世に関心がある人は、日本・西洋・イスラームの中世史の授業を横断的、比較史的に履修することもできます。多彩な科目群の中から、自分が何を学びたいかをできるだけ早くから主体的に決めて、履修計画を立ててください。また、履修の相談には適宜応じます。

3. 地理環境学副プログラム

地理環境学の副プログラムは、講義から12単位以上、基礎演習・地図学科目から4単位以上、専門演習Ⅰから2単位以上をそれぞれ選択履修し、「地理学フィールドワークB」を必修で履修します。講義によって地理環境学の幅広い分野の入門、概説を学ぶことができ、基礎演習・地図学科目によって観測・測量・地図・情報処理などのスキルを身につけることができます。フィールドワークの授業では、東京都内・近辺への日帰りの実地旅行によって、現実の場所や地域において生きた知識を学んでもらいます。なお、フィールドワークには複数回参加してもらいます。本プログラムを選択する学生は、フィールドワークに早い学年から参加することが望まれます。

地理環境学は、自然・人文・社会科学の幅広い分野に関わりがありますが、特定の場所や地域への強い関心をもつことによって、幅広い学問分野の中から関連する知識や考え方を自分に引き付けることができます。したがって、他のプログラムを主として、地理環境学を副プログラムとする場合に、主プログラムで学んだ専門知識が「どこ（場所や地域）で当てはまるか」と問いながら受講すると、効果的な学習ができるでしょう。

4. 日本語・日本文学副プログラム

このプログラムは、日本語・日本文学以外のプログラムを主とする学生のためのカリキュラムです。基礎的知識の広範な習得を重視して、科目群も広範かつ基本的なものを配置しています。すべての時代・分野にわたって広く履修することも、また特定の時代・分野を集中的に履修することもできます。

5. 中国語圏言語文化副プログラム

本プログラムには、中国語の実践的運用能力を習得するための科目群（専門中国語）、現代語学・言語学および現代文学・現代中国に関する基本的知識を学ぶための科目群（現代言語文化）、古典語学・文献学および古典文学・古典文化（古典言語文化）の各分野の研究技能を強化するための科目群が用意されています。「中国語学概論」と「中国古典文学史（先秦～唐）」という2つの必修科目のほかはすべて選択科目ですので、各自の関心にしたがって自由なカリキュラムを組みあげ、学際的な学習を行うことができます。また、1、2年次に履修したコア科目の中国語力を、「中国語ヒアリング基礎」「中国語コミュニケーションスキル」等の履修によって、さらに高めることができるでしょう。

6. 英語圏言語文化副プログラム

「英語圏」言語文化を「副専攻」として修めるのに必要な科目を、3段階に分けて設定しています。

第一段階は、基本的な英語の運用能力と、英語圏の基盤的知識を得るためのもので、4単位履修してください。

第二段階は、前記の履修を前提にして専門的な科目を用意しています。8～10単位履修してください。

第三段階は、専門性と英語の運用能力の両方において、さらに高度な科目を用意しています。6～8単位履修してください。

なお、第二段階と第三段階では、追究したい専門領域（英語圏文学/文化学か英語学）をある程度、まとめて履修することを奨めます。

7. 仏語圏言語文化副プログラム

本プログラムの教育目標は、仏語圏言語文化以外の主プログラムを履修した学生が、自分が学んだ主プログラムの内容と、本プログラムの内容とを関連させて、学際的な知識や複合的な能力を獲得することです。

本プログラムは次の4つの科目群から構成されています。このうちから20単位履修してください。自分の関心に応じて、特に1つの分野を集中的に履修してもよく、また幅広くいくつかの分野を履修するのもよいでしょう。

- 1 フランスの周辺国（特にドイツ語圏の国々）を中心として、広くヨーロッパの言語や文化についての知識を獲得します。
- 2 フランス語圏の文化や社会について知見を得ます。
- 3 フランス語の運用能力を高めます。
- 4 フランスの文学や思想を分析します。

8. 日本語教育副プログラム

日本語教育コースは、副プログラムのみを提供しています。

日本語教育コースの教育目標は、多様な言語、文化的背景を持つ学習者を理解し、彼らのコミュニケーション能力を向上させるための基盤となる外国語または第二言語としての日本語教育に関する諸理論や方法、専門性と実践力をもったグローバル社会の日本語教育専門家を育成することです。そのために外国語・第二言語としての日本語教育のスキルを獲得し、国内外の教育機関等で活躍する日本語教育専門家に必要とされる専門知識の基礎や実践力を学びます。

日本語教育副プログラムについては、所定の科目群中、必修科目である「第二言語教授法演習Ⅰ」を2単位履修し、さらに、それ以外の選択科目を18単位履修すれば、このプログラムの必要要件を満たすことができます。科目群には概論、演習、特殊講義がありますので、各自の関心に応じて履修してください。一部の科目、たとえば、「日本語学概論Ⅰ」、「日本語学概論Ⅱ」は隔年開講、「異文化間教育学演習」は3年に1回、開講されますので、気をつけて履修してください。

日本語教育副プログラムで開講している科目を履修することで、日本語教育機関の教員要件「日本語教育に関する課程」を満たすことができます。詳しくは『履修ガイド』を参照してください。

9. 社会学副プログラム

社会学以外の主プログラムを履修する学生を対象とした副プログラムでは、社会学・行動科学の基礎を学ぶために「社会学総論」を含む学科共通科目（人間社会科学科の学生は他の選択科目で代替可）を2科目4単位履修するほか、「社会調査法」4単位を必修とすることで社会学の特色である実証研究の方法を修得します。また社会学の講義科目から4科目履修することで多様な社会学的テーマについての理解を深め、社会学の演習科目2科目に参加することで、反省的批判的思考の訓練をしながら自らの問題関心を育ててゆくことを目指します。演習科目は基礎知識を前提としますので、先に講義科目を履修していることが期待されます。また「社会調査法」は通年4単位科目であり、社会調査の全プロセスを実際に一通り経験することが目標です。調査票を作成したりデータ分析をしたりすることが主な内容であり、社会調査や社会統計学についての基礎知識を既に他の科目で身に付けていることが強く期待されます。

10. 舞踊教育学副プログラム

舞踊教育学副プログラムは、必修である舞踊学概論を含めて概論を4科目（8単位）以上選択し、さらに特殊講義、演習、実習の中から適宜科目を選択して合計20単位を履修することが求められます。これらの単位の内、4単位以上は特殊講義以外の科目から選択しなければなりません。概論や特殊講義によって舞踊に関する知識を学び、演習によって学んだ知識を自分のものとしてすることができます。理論と実践の両面を追求するという観点から、実習科目を選択して履修することも重要です。特殊講義は原則として隔年開講となりますので履修計画を立てる際には注意してください。

11. 音楽表現副プログラム

芸術・表現行動学科音楽表現コース（専修プログラム）は、入学時に専門の実技試験を経て専門科目を学んでいます。したがって、副プログラムとして他学科、他学部などから履修できる科目は、音楽の学問的研究である音楽学の科目から成り立っており、実践的研究の分野である実技科目については履修できないことになっています。

音楽学の科目は、学問的な概要を示す「音楽学概論」と日本の伝統音楽の歴史を概観する「日本音楽史概論」以外は、ほとんどが英語のテキストを使用しますので、自分で英語の文章を読み進めていく力を必要とします。

また、西洋音楽史は、「西洋音楽史Ⅰ」「西洋音楽史Ⅱ」で16世紀頃までを扱い、「音楽形式論」でバロックからロマン派、「音楽史特殊講義」で現代音楽までを扱うので、それぞれを通して、西洋音楽史の流れをつかめるようになっています。

他方、日本音楽史と民族音楽学などは、単なる知識のカatalogではなく、音楽自体についての様々な考え方も含めて講義を行ないます。

外国語については、英語のみならず、西洋古典語やアジア、ヨーロッパの諸言語などを積極的に学ぶことが望ましいです。

12. 教育科学・子ども学学際プログラム

子どもと教育を理解することにより、自分の専門をより深め、あるいはより広い視野から捉えることを目指します。

本学際プログラムは教育科学プログラムと子ども学プログラムの科目で構成しています。どちらかを重点的に履修してもかまいませんし、あるいは内容や性格に近い科目を両方のプログラムから選んで学ぶこともできます。

なお、教育科学主プログラムを選択している学生は、「子ども学総論」を含めて子ども学プログラムの科目の6単位以上、子ども学主プログラムを選択している学生は、「人間と発達」を含めて教育科学プログラムの科目の6単位以上、履修してください。6単位以上履修する科目には、主プログラムとして履修した科目の単位は含めません。教育科学・子ども学以外の主プログラムを選択している学生は、本プログラムの科目を自由に履修してください。

13. グローバル文化学学際プログラム

国境をこえたモノや人や情報の移動は、私たちの住む世界を大きく変えています。グローバル文化学のプログラムがめざすのは、文化の差異を理解し、大切にしながら、その差異を超えて協働し、何かを共に創り出すような、グローバル化時代の新しい市民を育てることです。主プログラムでそれぞれの専門的な学修を進めながら、グローバル文化学学際プログラムを履修することで、国際協力や国際化するビジネス・学校教育・地域社会等の場などで活動するために必要な知識や態度を身につけることができます。

この学際プログラム（20単位）のカリキュラムは、政治・経済・文化におけるグローバル化のさまざまな側面を学ぶ基礎科目と、グローバル文化学の柱である地域研究・地域文化、多文化交流・多文化共生、国際関係・国際協力の三つの分野の科目、実習および方法論の科目からなっています。

基礎科目は、1～2年次から履修することができる科目で、ここから4～8単位を履修します。残りの単位は、下記の科目群から自由に選択履修ができますが、系列にそって履修することによって、知識を深めていくことができます。

地域研究・地域文化は、地域や文化を理解（comprehension）する科目群で、グローバル化によって、地域の社会や文化がどのように変わってきているのかを、アジア太平洋を中心としたさまざまな文化圏をとりあげて考えます。

多文化交流・多文化共生は、地域や文化をこえた交流（communication）を学ぶ科目群で、国内外での多様な接触や交流が個々人の行動にどのような影響を与えるか、相互理解と協調・共生にはなにが必要かを、知識と実践の両面から学びます。

国際関係・国際協力は、地域や国家をこえた協力（collaboration）を学ぶ科目群で、政治、経済、社会、文化の諸領域にわたる、国家、国際機関、企業、NGO/NPO、個人などのさまざまな活動や役割を学び、国際関係・国際協力のあり方を探ります。

実習科目は、地域理解や文化間の交流や国際協力を、実際の現場で考えることが目的です。カリキュラムの三つの柱にそって3種類の実習が用意されています（実習受入者数には上限がありますので、希望者が多数の場合はグローバル文化学主プログラムの履修者を優先します）。

このほか、グローバル文化学の研究方法を身につける科目として、「フィールドワーク方法論」と「グローバル文化学方法論」を開講しています。

